

神の手

上

立ち読み
版見

林 雅子
MASAKO HAYASHI

e 文庫 Bunko

目次

神の手「上」

4

解説

歴史に残る電子出版

大森望

78

登場人物一覧

来生恭子

失踪した作家

三村幸造

新文芸社「新文芸」編集長

木部美智子

フリーランスライター

広瀬

正徳病院内科医

高岡真紀

広瀬の患者

野原悠太

二年前に行方不明になっている幼児

高田信浩

野原悠太を含む連続幼児誘拐の容疑者

真鍋

雑誌「週刊フロンティア」編集長

葛西

高田信浩の弁護士

本郷素子

女流作家

嶋

帝京出版社編集長

一九九九年五月二十五日。

その日は本郷素子にとって最良の日といえた。十数年にわたる作家生活の中でこれほど誇らしいことはなかった。

ホテルの玄関口には続々とタクシーが乗り着ける。彼らがタクシーを降りるとドアボーイは待ち構えたように颯爽とドアを開け、招待客が入ってくる。本郷素子はその光景の全てが今自分のためにあるのだと思うと、興奮が抑えられない。

なにもパーティーが初めてというわけではない。自分が主催するにしろ、出席するにしろ、むしろ彼女はパーティーを好んだ。その日のパーティーは、彼女がいつもするものより会場が広がったとか、高級だったとかいうこともない。肝心なことはいつもよりグレードアップした出席者の顔ぶれであり、なにより誇らしいのはその横断幕なのだ。

某老作家はにこやかに祝辞役を務める。

「エンターテインメント、もしくは大衆娯楽作品というものと純文学というものの線引きをどこに求めるか、いや、線引きを求めること自身に無理があるのだとか、今、日本の近代文学史上かつてなく、それこそ雨後の筍を思わすほどにミステリー作家が輩出するようになり、改めてそんな議論する向きもございますが、」

各出版社よりそれぞれ編集者数名。有名人多数。雑誌記者がいつもより多かった。そして他の小説家のパーティに比べて、同業者よりタレント、有名人が目についた。その日の招待客の中にはいくつものベストセラーを持ち、大きな文学賞の選考委員を務める大御所作家が多数見受けられた。そんな中でこの老作家はここぞとばかり誇らしげに、手垢を超えて雑菌と体温の果てに黴さえ生えていそうな言葉で会場を飾っていた。

「それでも純文学という言葉の持つ独特の吸引力には、作家というものは抗えないものでありまして、それは古今東西、厳粛なる事実なのでありまして、」

あるエンターテインメントの作家は鼻で笑って隣に立つ編集者になにやら耳打ちし、それに対して編集者は笑ってみせた。

老作家は壇上でちょうど殺風景な女の髪に彩りの花を散らすようにジョークを挟んで笑いを誘う。それはある有名な小説の誕生秘話で、その著者はすでに全文書き上げているながら、書き出しの一文の、二つの修飾語のうちどちらを先に置くべきかでなお三年悩みぬいたというもので、彼がそれをジョークとして持ち出したことにあからさまに不快の表情を浮かべたゲストもいたが、ほとんどの参加者たちは老作家の祝辞など聞きとがめるほどに聴きもせず、こと本郷素子に至っては、てんから聴いてもいない。

「この本郷先生がこの『花の人』という小説で一つの転機

を迎え、本人さえ認識していなかった潜在的能力をここに開花させ、純文学作家としての第一歩を」

彼女は七五三を祝う少女のように、ただ隣に晴れがましげに立っている。

四十歳を超えたばかりの本郷素子はまだ十分に若かった。醜くもなかった。文章も下手ではない。しかし彼女の若さという容貌といい作家としての実績といい、そういう彼女の要素の全てが彼女の望む晴れがましさや称賛にはいつも不釣り合いだった。彼女のパーティではいつも、招待客が主役の興奮と共に陶醉するには何か不足する。特にその日はそうだった。

壇上の老作家はユーモアという知性を自分はちゃんと心得ているとばかり、まくし立てている。しかし痩せぎすなその老作家が、その長い挨拶の中で聴衆の笑いを誘ったのはただ一点、「本人さえ認識していなかった潜在的能力」の一言だけだった。もちろん当人としてはその言葉をユーモアのつもりで言ったのではない。加えていえばその笑いは彼が自分の挨拶の中に欲しかった会場を包む暖かなものでもなく、ある種の冷笑であったことに、本郷素子は気づいていたが気にしなかった。

彼女はその日そこに集まっていた誰の目も、思惑も、気にしなかった。

なにものも回ってくるときには回ってくる。彼女には金も名誉も成功も間違えて送られてくる郵便物のようなもの

で、自らの能力に係わらずある日突然舞い降りるものなのだ。それが彼女の簡潔な人生観だった。そして誰も、彼女にそれ以上の人生観など求めようとはしない。彼女はただ、その席に立つことが嬉しかった。自分の名がその本の背に打たれて書店に並ぶということが嬉しかった。収入は、かつての作品、すなわち小説でもエッセイでもなく、社会派という名のもとに吐き出されるゴシップの拡大版のようなノンフィクションが稼ぎ出す方が遥かに多い。それでも「純文学」という言葉は彼女を陶醉させた。

マイクの前の老作家は機嫌良く言葉を重ね、本郷素子はただそこに顔を紅潮させて立っている。その老作家の話の間にどこからか無遠慮に聞こえてくる、グラスがテーブルにあたる音、フォークが皿にあたる音、雑音の中に時折混じる、祝辞とは無関係に発せられる笑声、そして遅れて続く追従笑い。少なからぬ人々の表情にあるものは祝福とはほど遠い。それでも彼女は構わなかった。その時彼女に見えていたものはその会場の中央の丸テーブルの上にしつらえられた豪華な花であり、横断幕に書かれた「祝『花の人』 新世紀文学賞受賞」の文字であり、そこに自分の名が書かれているという現実だった。彼女は今、自分の身にふってわいた純文学作家の名に酔いしれていた。

回ってくるときには回ってくる。渡り鳥だって時には海の上に浮かぶ思わぬごちそうの上に羽を休めるチャンスを持つことがあるだろうように。そしてそれはたぶん、一回

でなく、複数回なのだ。誰の人生にだって、複数回なのだ。老作家がパーティの主役にマイクを譲った時、本郷素子は壇上で低い地響きのような歓声に迎えられた。彼女はその声を聞き、一同を見回して、満面の笑みで挨拶をはじめた。それは「花の人」が出版されて三年目の初夏だった。

同年同月 和歌山県。

白浜の海を臨む断崖に男が一人立っていた。

空は雲を浮かべて晴れ渡り、海が水平線でその空と接する。紀伊の明るい日差しを受けて松の緑は一層艶やかだった。

その片隅、断崖へと続く小道のそばに小さな祠ほらがある。そこには擦り切れて輪郭を失った地蔵たちが忘れ去られたようにあった。

鼻のとれたもの、顔の彫りの消えたもの。首にかかったエプロンの朱色さえ色あせている。十五、六体のその地蔵の間には木の墓標が何本も突き立っていた。木は日に焼けて、風雨に黒くただれ、その木に書きつけられた墨字の文句ももはや判別できない。それはまるで数百年の年月をここに過しているようであり、地蔵を含めて祠全体がここに放置されているようだった。

海は白く輝いて、遠く水平線の彼方まで視線を遮るものはない。男はその祠を背に海を見つめていた。

波が断崖に幾度も寄せては返していた。水面は日を照り返してガラスの粉をまぶしたように輝いていた。海はその光の幕の下に幾億年の闇を抱えて凪いでいる。

男はゆっくりと顔をあげた。そして再び目を瞑る。大地

の鼓動に耳を澄ませるように、さざ波の音の中に小さな産声を聞き分けようとするように。

無造作に伸びた髪が突然の風にあおられて吹き上がった時、男の左目の斜め上に古傷が一本、眉を横切るようにあるのが光に浮き立った。

やがて彼はまぶたを開いた。海の照り返しがその瞳の中にまで写って、彼はこの世の全てを見定めようとすることをように無心に視線を広く水平線に向けて投げた。

凧いだ海にはなんの痕跡もない。ただ静かに、水が久遠の時に飽きたようにたゆとう。

男はしばらくそこに立っていた。そしてやがて立ち去っていった。

三村幸造が新文芸社の文芸誌「新文芸」の編集長に昇進してはや一年半が経った。

当然の人事ではあったが、本人には奇妙に醒めたものがあった。出世に欲がなかったわけではない。男であるから悪い気はしない。実際家族も喜んだ。昇進の夜、普段はすれ違いばかりの上の娘は、風呂上がりの濡れた髪のまま居間に顔を出して「おとうさん、おめでとう」と一言言っただけで、忙しそうに部屋に上がった。今年大学に入ったばかりの下の娘は新しい名刺を珍しそうに眺めながら「編集長の上は何？」と問うた。二人の娘が部屋に引き取った後、妻がテーブルに残された名刺を手にとって、「副つて一文字が取れるだけでこんなにすがすがしいものかしら」とポツリと呟いたのは、子育てを始めとする家庭の些事に一切関わらなかつた夫を持つ自分自身に対するねぎらいだったような気がした。しか昇進の興奮は始めの三カ月で消し飛んだ。その三カ月で彼が学んだことは、文芸誌の編集長などなるものではないということだった。

大体が売れない。売れなくても各出版社の文芸雑誌はその社の顔であり、ステイタスであり、ゆえに企業が野球チームを持つように、利潤を度外視した存在であるから始末が悪い。エンターテインメント系の小説誌でさえ社の収益の足を引く張る存在だというのに、その五分の一も売れない文芸誌は、まさに出版社の意地以外にその存在理由がないとまでいうやからもいる。漫画と女性誌で稼いで文芸誌で損を出す。資本主義的企業倫理から言えば即刻廃刊であろうその部署が、「我こそは文芸なり」とプライドばかりが高いから煙たがられる。

赤字覚悟で利潤システムが働かないことがはじめからわかつているのだから売名的ボランティアだと位置づけた方が物事はスムーズであり、現に、かつての三村がそうであったように、文芸編集者のほとんどがそういう浮き世離れた哲学的境地で仕事をしている。文芸誌編集部にも売り上げ数字は、毎月カタカタとファックスを鳴らして販売部から下りて来る。しかしここはそのような下世話なことに関わってはいない。そもそも文学は、競争原理とは相いれないものであり、商業主義を導入すれば根腐れを起こして消滅する。それを、売り上げを競うなどと、目抜き通りのファーストフードじゃあるまいし。

「文学は売れない」が転じて売れないから文学だなどという開き直りが横行し、いつしかマイノリティーであることに美徳さえ感じるような風潮が作家の中に蔓延して、結果、

文芸作品は存在そのものに意義があるなどという、一見哲学的な物へと押し上げられた現代の文学の位置に、みな危惧を抱き落胆はしていても、彼ら文芸部のスタッフが文芸小説を過酷な消費文化の中に投ずる気のないことは明白なのだった。彼ら文芸部のスタッフは自らの使命を、売ることとでなく守ることに見いだしている。井戸の水を次世代へと守り伝えること　しかし編集長になって初めて三村は、文芸小説雑誌編集部にも「売り上げ」という言葉がホコリをかぶった死語ではなく未だ強大な力を誇って存在していることに気付いたのだった。そして同時に、毎月カタカタとファクスを鳴らして舞い降りてくる数値を、現実の恐怖として　例えば頭の芯が軋むような実感を伴う恐怖として　理解するのはただ一人編集長だけである、すなわち「売上部数」などという芸術の敵とは編集長ひとりが見守らなければならぬということを感じたのだった。

毎月カタカタとファクスを鳴らして舞い降りてくる数値はインクの染みなどではなかったのだという厳然たる事実。かくして三村は、六千部の売り上げをあわよくば七千部にという不毛な挑戦に一人血道を上げなければならぬなつたのだった。

毎月販売部数が数字で現れるから、その明確さゆえに「頑張れ」という社長からの叱咤激励が現実感を持っているというよりむしろ強迫的でさえある。部数が伸びないのは作家がよい作品を書いてこないからなんですと、部数会

議でいえるものなら言いたいところだが、そこは暗黙の了解で既成の事実であるから、いまさらなにを言っているんですか、それを書かせるのが編集者でしょと一蹴されるのがおちだから言えない。

昔三村がヒラの編集者として文芸誌の編集に携わっていたころは、文芸雑誌の意味は、作家に発表の場を与えろということだけでなく、連載小説を載せて、本にするべき質のいい長編作品の供給源となるということもあつたのだ。しかし数字が絡むと様相は変化する。連載小説ばかりだと売れないものがますます売れない。そこで読み切りの短編を多くし、そのかわりエッセイをとりあえず連載ものにして、あとから本になるように算段する。大作家が死ねば、頭をひねってそれらしい「追悼特集」を組む。数字という魔物の前には編集長は「俗物的」という汚名をほぼ一手に背負わなければならなかった。

連日の会食に夜のスケジュールは埋まり、パーティには颯爽として姿を出さねばならず、会社では多数の作品について載せる水準に達しているか否かの決定をしなければならず、しかし回ってくる原稿全部に目を通す時間もなく、結局三十年に及ぶ編集者人生で培った勘と担当者の意気込みや顔色で判断するしか手はない。なぜ小説の中身でなく表紙のデザインの決定に半日を費やさなければならぬのか。数字に追われ、気難しい部下に追われ、わがままな作家連中に翻弄されて、その上編集長職というのはミスがな

いように気を配り、人をうまく、すなわち不満を抱かせないように器用にそつなく動かす社交術のようなものが要求された。それは彼のもつとも不得意とするところだったのだ。

彼は小説が好きだった。そして小説を書く人種に愛着を持っていた。会社の方針が、持ち込み原稿は読まないと決まっただけでも彼はそれを無視して、何かの縁で彼の手に渡った原稿は読んで返事をした。人は彼を昔気質の編集者といい、不器用と言い、偏屈と言った。しかし彼自身は作品の中に才能の底光りを見だし、鶏が卵をかえすように、金の卵が殻を破って世に飛び出すまでを温めてやる、その仕事が好きだったのだ。

事実彼が世に送り出した作家は数知れなかった。彼らは売れてしまえばいつしか育ての親である三村という編集者の名は忘れていく。それでも彼はそういうことを気にしなかった。彼には自分が送り出したという自負だけで十分だったのだ。売りだすまで引き上げて、そして忘れられていく。それこそが編集者の本分であるとさえ思っていた。ただ文学に魅せられた、右も左も分からぬ埋もれた才能を、世間へと導く杖となる。そのためには飯も喰わすし酒も飲まずし職も世話するしアパート探しまでしてやった。そうやって大切に、彼はその才能を育てるのだ。彼はそういう自分の職業に対する姿勢に誇りを持っていた。

だから彼が人事異動とおぼしき時期の前に社長室に呼び

出され、次期編集長の職を打診された時には、予期していたとはいえどこかで本当にたじろいでいた。そして帰りの電車の中でぼんやりと考えたことは、編集長の任を解かれた時、すなわちクビになった時の次のポストのことだった。三カ月で職を解かれる編集長など業界にはごまんという。まあ、次のポストがどこであるかと本を作ることにさえたづさわっているのであればそれでいいではないか。

その三村が就任してはや一年半を迎えている。そして毎日作家やその関係者との会食と連日の会議と社長の強迫的な激励の返答に追われている。

根が頑固で片意地だから、売らなくてもよい喧嘩を売って、言わなくてもいいことを言っただけはいつも崖っぷちにいる。嘘と追従が下手で、思わぬところで窮地に落ちたりもする。しかしそういう彼の実直さを珍しがって後押ししてくれる人もいる。庇護者がいて敵対者がいて、なんだか戦国のようでもあり、それでも彼は編集長としての期間を長らえて来た。最近では少々要領を覚え、右から左に隣に皿を回すように副編集長に仕事を回すことにも慣れたし、部下の振り回すほぼ高圧的とさえ言える文学論を、突っぱねず、関わらず、うやむやにしながら宙に浮かす術もほぼ完璧に手にいれた。その電話はそういうある日の、ある朝にかかってきた。

それは日差しが強くなりはじめた、六月の始めの月曜のことだった。

三村は朝一番の編集会議を終えて、十一時に席に戻り、原稿の山を横目に新聞を広げていた。価値のある作品がその原稿の山の中に紛れている可能性は極めて薄い。だとすればこの小説の山を束ねて一冊の冊子を刊行しなければならぬ自分としては、どんな化粧を施せばその不足分を誤魔化せるのか。

新聞の広告欄に、彼がかつて育て上げた作家の千枚の長編書き下ろしの広告が他社大手出版社から打たれていた。最近では小説の新聞広告に作家の顔写真まで載せる。悪趣味だという声もあれば、ないよりは講読意欲をそそるだろうという消極的賛成者もいる。だからと言って小説が面白くなるわけでないことだけは確かだ。その書き下ろしの著者は人のいい奴だったが頭は悪かった。人がいいだけでは小説なんぞ書けやしない。千枚の原稿となると、話しの辻褄を合わせるだけでも大変だろう。面白くないのは読まなくてもわかる。この詐欺のような作品にこんな誇大広告をかけて、かの社はどう元を取るつもりだろうか。それとも購買者に対する会社ぐるみの詐欺だろうか。ちやうど見せ物小屋の呼び入れ文句のような。

三村がその電話を受けたのは、この男の救いは自分が作家であるとは錯覚できる無神経さなのだをつくづくと懐かしくその顔写真を眺めていた時だった。

「三村さん、お電話です。広瀬さんて方」
広瀬という名前に心当たりはなかった。

「男の方です。三村編集長をとご指名で」

三村は受話器を上げた。

「わたし、正徳病院の内科部長をしています広瀬というも
のです」

四十前後の男の声だった。口ぶりには教養が感じられる。
しかし三村には、そんな名の病院にも、広瀬という医者にも
心当たりがない。

面識のない人間から指名で電話があった場合、相手はす
ぐに用件なり事情なりを切り出すものだった。しかしその
男は、三村が「どういうご用件でしょうか」と問うほどの
間をあけた。そして三村がそう問うてもなお、男は困った
ように間を取っていた。

「はあ、それが……」

どうやら彼自身、かなり困惑しながらここへ電話をした
ように思われた。

かつてある女性が、ある大作家の新しい作品が自分との
プライベートな関係を取り扱ったものであるから慰謝料を
くれと電話をしてきたことがあった。某作家の作品は盗作
である、何故ならばわたしはかつてそれと全く同じものを
読んだことがあるのだと滔々と弁じたてた初老の男性の受
け答えもしたことがある。彼らはこのようには淀まない。
紙に書いてあるものを読むように無感情に趣旨が一貫して
いるか、状況を判じかねるほどに感情的にまくし立てるか
なのだ。

男は一息の間を置いて、言った。

「唐突で申し訳ないのですが、高岡真紀という女性をご存じないですか」

三村はしばし考えた。しかしその名は記憶の片鱗にもない。

「いえ。記憶にありませんが」

男が受話器の向こうで小さくため息を漏らすのが聞こえた。それは妙に同情心を起こさせた。同情心と言うより、彼自身の困惑が三村の気を引いたのだ。

「失礼ですが、どういうことでしょうか」

責めているつもりはなかった。ただ、電話をかけてきておきながら、自分の困惑に気を取られていつかな事情を説明するという所にたどり着けない相手の男に対する少々の苛立ちはあった。男は気配を察してちよつと慌てたようだった。

「いえ、それならいいんです。全く見当違いな電話を差し上げたらしい。実はうちの患者の一人に突然小説を書きはじめたという女性がいて、少々心理的に不安定なところのある患者でしてね、その彼女が原稿をあなたに送ると言っただけで……」

「僕を知っていると？」

「はあ。高岡真紀って言うんですけど」彼はその漢字を説明した。高い低いの高に岡本なんかの岡、真紀は政治家の田中真紀子の真紀なんです。その声の調子は田舎の青年を

思わせた。それであてもないのに三村もちょっと考え込んだりもした。

「高岡真紀」

「ええ、三十半ばですが三十前後にしか見えません。小柄な美人ですよ」

三村は一息考えたのち、「申し訳ありませんが、心当たりはありません」と言った。全く心当たりがないのだ。男はあっさりと言き下がった。

「それならいいんです。いえ、彼女の持ってきた『緑色の猿』という小説が素人離れしていた上に、彼女があんまりはつきりとあなたの名前を言うものですから、医者として妙に気になりましたね。ちょっと事実関係を知りたいと思つた次第です」

不意に三村は遮った。「今なんて言いました？」

瞬間男の当惑を感じ取られた。三村はたたみかけた。

「その小説の題です」

「『緑色の猿』です」

緑色の猿

男は続けた。

「なんだか不気味なんです、怪奇小説でもない。なんていうんでしょう、懐かしいような、黴臭いような、押入れの隅に忘れられていた蒲団のような匂いのする作品。遠い昔の郷愁とでもいうんでしょうかね」

真夜中に視線に気づいて顔を上げると緑色の猿が部屋の片隅からじつとこちらを見ている。

視覚の中では焼き物のような置物なのに、意識の中では生きた猿であり、いや確かに置物だと目を凝らしてみれば、ふさふさと毛の生えた生々しい猿なのだ。

三村の脳裏に、その作品の一節がはつきりと蘇った。忘れ去った記憶の扉が不意に開けられたようで、三村は一瞬どこかに引き込まれるような気がした。

「ペンネームは来生恭子。来るという字に生きるという字を書いてきすぎと読むんです」

男がその名を言った時、三村は反射的に目を瞑っていた。丁寧な漢字の説明は頭上を通り越していく。

底のない谷を挟む崖の両端にいるような気がする。

距離は三メートルほどしかないのに、二つの間に横たわるものは永遠に深く、冷たく、神聖な闇なのだ。

松太郎は思った。冬の海に垂れ込める雲を灰色に塗る矢崎ならこれを黒く塗るだろう。しかし冬の荒れる海原にかかる空に絵の具の灰色を塗ればキャンバスの中からもうその空が失われるように、この闇を黒く塗れば決して的確ではない。視覚には黒くとも、黒ではない。光に犯される前、意識が存在する前、認識の向こう側、すなわち無　　すなわちもつと膨大なる床

そのようなもの

かの小説の言葉が頭の中に溢れ出る。それは遠い記憶ではなく、今耳元で朗読されるようだった。一語一句、なんの曇りもなく蘇る。もしもと電話の向こうで相手が言葉を促していた。

あれは過去なのだ。三村は目眩のような感覚を覚えながら、出来る限り穏やかにで善良な声を繕った。

「失礼ですが」

彼は目を開けると、にこやかに、しかし断固とした声を繕った。

「先生、正徳病院の内科部長とおっしゃいましたね」

三村は自分のそういった物言いが相手にいかに威圧感を与えるものかをその三十年の編集者としての歴史の中に知っている。それに対して男は良心的に追加した。

「はい。神戸の正徳病院です」

三村は再び衝撃を受けた。神戸　新幹線で三時間半の距離。禁煙の窓際。出来れば二つ並びの席、空いていませんか。彼女は新幹線の予約窓口でいつもそう言っていた。

三村は無意識に声をすべらせた。

「ではその女性も」

男は神妙に答えた。

「はい」

三村は動揺をひた隠しにして極めて事務的に答えた。

「ではなにかの思い違いでしょう。そのような女性に会った記憶もないし、名前にも心覚えがありません。お役に立ってなくて申し訳ありませんが、どういう事情かこちらでもわかりかねます」

三村はいぶかしげな相手を残して、ご用件はそれだけでしようかというのと、と受話器を置いた。静かに。心のどこにも響かぬように静かに。

三村の心のどこかはいまだ痺れたままだった。目の前にはさつき見ていた新聞が広げられたままにある。ざらついたその紙には懸命に聡明さを演出して遠くに視点を合わせている間の抜けた男の顔が印刷されている。その隣のページに帝京出版の新刊の広告が紙面下五段を占めていた。

本郷素子『花の人』 新世紀文学賞受賞！ 女流作家ならではの新鮮で繊細な感受性が紡ぎ出すこの……

三村は虚ろにその紙面を眺めていた。

来生恭子 遠い昔に封印したその名前。肉体がいずれ分解されてその実体を失うように、時間が分解したと信じたその名前。それはやがて無に帰るまで、永い眠りについている。

三村は忘れようとした。

T作家はいまだに自分の長編を載せてくれとごねている。女流作家のMは、座談会に彼女が出るならあたしは出ないと言ってきた。広告部から、今月号の広告に商品の定価ミスがあつたから至急差し替えたい連絡が入った。M作家は

かつて、ガルシアマルケスの「百年の孤独」を、「百年の狐」と思い込んでいた作家だった。狐を信仰する部族の神秘的な物語だと信じ、あのネーミングがいいと感嘆しきりであった彼女に、依頼した今回の座談会の議題は「中南米文学の源流」だった。思うに、彼女は次には名前の順番にこだわるだろう。こっそり自分用の台本を欲しがるかもしれない。いや、気を利かせて台本を渡すとひっくり返って怒るかもしれない。賞味期限の切れかけた作家にその事実を通達するのも編集長の役目だろうか。会議に出たあと作家との食事を済ませ、会社に戻ってほろ酔いの頭で机に積まれた原稿に深夜まで目を通す。翌日は担当編集者を変えないかぎりお宅の雑誌には小説を書かないと言う作家の元へ機嫌を取りに行った。社に帰ってみると、お宅はいつから右翼になったのかと苦情の電話が来ていた。三村が再びその名に記憶の扉をねじ開けられたのは数日後、その医師からの電話が奇妙な夢を見たかのような錯覚に姿を変え初めていたところだった。

三村は一通の茶封筒を受け取った。

それはB4サイズの手紙の入る茶封筒だった。裏には住所が丁寧に書き込まれている。

神戸、そして差出人は高岡真紀。

中にはワープロで書かれた作品が入っていた。四百字詰めの手紙に直すと三十枚ほどの短編だった。一番上には題名とペンネームが書かれた白い紙が乗っている。

『緑色の猿』

来生恭子

三村のどこかが再び現実感を失った。

彼は作品をめぐった。それは間違いなく彼女の作品、彼女が八年近くも前に書いた初めての短編『緑色の猿』だった。彼女はこの作品にご執心だった。そんな猿を見た事があるのかと三村は問うた。イエスと言えば精神科にでも連れて行かなければならないかと思ったものだ。しかし彼女は笑っていいえと答えた。そのくせ「ではなぜ緑色なのですか」と問えば、「だって、そうだったんですもの、はじめから」と困ったように答えた。

三村は彼女のその様子をはつきりと思い出す。見たのですかと重ねて問うた。彼女は困ったようにいいえと答える。どうしてそんなことを聞くのかというように怪訝げに語尾をちよつと上げて、その仕様があとけなく、まるで彼女自身小さな置物のようにも見えた。目元は大きくくつきりとして、瞳を見開いた子猫を思わせる。

三村は思い出すのだ。そのままそつとポケットに入れてしまいたいほど可愛いと思ったあの日のことを。

三村は心を奮い起こした。この作品がどうして人の手に渡ったのか。彼女は自分の作品を人に見せない人間だった。そしてこの作品を含め、彼女の書いた全ての作品はまだあ

の部屋に眠っているはずなのだ。三村は高岡真紀という、その送り主の名を見つめた。広瀬という医者 of 電話が蘇る

高岡真紀という女性をご存じですか。

何故高岡真紀という女は私の名を知り、この原稿を持ち、かつ来生恭子の名を知っていたのだろうか。

白い紙に書かれた来生恭子と言う文字が三村を見上げていた。

三村にはそれがあの恭子自身に見えた。彼女がそこに佇んで、じつと自分を見つめているように思えた。あの『緑色の猿』の中の猿のように魂だけに化身して、責めるでもなく、すぎるでもなく、どこか遠い所から投げかけられたようなガラスのような静謐な光をもったただじつと自分を見ている。

誰かが彼女の姿を借りている。そしてわたしを愚弄している。そして三村は不意に思った。いや、責めていると。高岡真紀と書かれた名前の隣には正確な文字で電話番号が記してある。その正確さはあたかもどうぞ間違いない連絡が取れますようにと願をかけているようだった。見た事のない筆跡だった。その字を見た時、彼の中にぽつんと怒りが灯った。

彼女の名を騙る者がいる。

三村は受話器を上げて、記載された高岡真紀の番号を押した。

はいと出たのは女だった。

「新文芸社の三村というものですが、高岡真紀さんはご在宅でしょうか」

女は自分の名を知っていると聞いていた。そしてこの小説は雑誌「新文芸」編集部宛てではなく、三村を名指しして送られてきた。この女には何かの意図があるのだ。

「わたしが高岡真紀ですが」

聞き慣れない女の声がする。白い紙の中で来生恭子という文字がじつと三村を見上げ続けていた。

078というボタンの位置は三村の指に馴染んで今も忘れることはない。もうこの呼びかけに答える人間はいないのだとわかっていながらそれでも電話を鳴らしづつけたあの日々を三村は思うのだ。あの思いを、今、この電話の向こうにいる女が愚弄している。三村は丁寧で物柔らかな声を出した。

「原稿を送っていただきましたね。『緑色の猿』という作品」

「ええ」女の声は取り澄ましていた。

出版社に原稿を送り、編集者から返事をもらう時、人はひどく緊張するものだ。プロの作家でさえそうなのだ。一言一句を聞き逃すまいと張りつめて、その懸命さが微笑ましいときもあれば重い時もある。しかし今、この見知らぬ声を持つ女には、その緊張感がかけらもなかった。まるで当然の電話を受けるかのように。三村は強い不快感と不安

を覚えた。

「送っていただいた小説なんですが、あれはあなたがお書きになったものですか」

女はその問いに驚きもしなかった。彼女はさきと同じく、ほぼ横柄にさえ聞こえる語調で「ええ」と答えた。間の抜けた聞き方だったかもしれない。そう感じていながら、三村はもう一度問いかけていた。「あなたがお書きになったと？」

女は今度ははっきりと答えた。「ええ。あたしが書きました。それがなにか」

怒りが突き上げた。同時に彼女の挑発に乗ってはならぬと自身の中から声がした。

『緑色の猿』は来生恭子の作品だ。すなわちこれは間違いなく挑発なのだ。三村は語調を変えた。

「面白い作品でした。一度お会いできませんか」

「ありがとうございます。そうしていただければ光栄です」

プラスチックのような冷たい肌触りの感謝の意だった。

そこにはなんの緊張も困惑もない。

「いつが都合がよろしいですか」

「わたしの方はいつでも結構です」

日時と時間を指定する間も、女はただ「ええ」と「はい」と「わかりました」と答えたただだった。三村はぼんやりと考えた。彼女はなぜ嘘を付くのか。そしてなぜわざ

わざ自分の元にあの小説を送りつけてきたのか。

連絡をしてはいけなかったのかもしれない。このままうやむやにするべきだったのかもしれない。

来生恭子という文字が、それでもじつと三村を見上げていた。

高岡真紀がやって来たのはその週の金曜だった。

三村は新宿東口の駅ビル八階にある喫茶店を指定した。そこは編集者が人と待ち合わせるのによく使う場所であり、十年前来生恭子と二度目にあつたのもこの喫茶店だった。最初は出版社に訪ねてきた。応接室で待つ彼女を初めて見たとき、その屈託のない美しさに、このような人が小説なんぞ書くのだろうかと驚いたことを今もはっきりと覚えている。二度目に会つたのがこの喫茶店だった。三村は時間に少し遅れて行つた。彼女は俯いて、彼に送つた原稿のコピーを熱心に見返しているようだった。三村はたつた一度しか会つたことのない彼女を見間違えることはなかった。彼女は人の気配がするたびにそうしていたのだろう、彼が入り口に立つとはつと顔を上げ、それが三村だとわかると大急ぎで立ち上がり礼をしたのだった。あれから長い時間がたつた。それでもあの時の彼女の横顔も服装も、その座っていた位置さえ忘れることはない。そして今あの日、来生恭子が目に鮮やかな黄緑色のワンピースを着て座っていた。たちょうどその場所に、一人の見知らぬ女が座っていた。

女は三村を見ると立ち上がった。

年の頃なら三十過ぎ、ちょうどあのころの恭子と同じ年頃だった。女はまっすぐに三村を見ていた。まるで以前から彼を知っているように。

「高岡真紀さんですか」

彼女はあの、電話で聞いたのと同じ、どこか取り澄ました声ではいと答えた。それきりなにも言おうともしないし、問おうともしない。ただじつと三村を見据えている。

三村は背中に水が流れるように冷えるのを感じた。高岡真紀という女性は確かに三村には見たことのない女性だった。しかしその物腰、瞳の光には覚えがあったのだ。

「原稿、読んでいただいたそうですね」

「ええ。読みましたよ」

「どうでしたか」

その目は力を帯びて輝いていた。いまにも躍りかかりそうな気迫に満ちている。それを見つめるうち、眩暈がするような気がした。三村は少し歩きたいと思った。

「場所、変えませんか」三村はそういうと彼女をそこから連れ出した。そして彼女がそこから立ち上がり、ゆっくりと歩き出し、斜め後ろを歩く高岡真紀というその女が左足を引きずっていることに気づいたとき、三村はまるで背後に悪魔を連れているような錯覚に捕らわれた。恍惚として再び現実感を失っていく。彼は辛うじて平静を装った。

三村はしばらく歩くと彼女を広くて人けの少ない喫茶店

へと連れて入った。

彼女は座るなり、問うた。「どうでしたか」

三村は距離を置くように、ゆっくりと答えた。「ええ、よく書けていました」

女は満足そうに微笑んだ。

三村の、彼女を見る視線は冷たかった。不安があり、不気味さがあり、そして愚弄されていることへの憤りがあつた。三村はその視線で彼女の嘘と演技を見極めようと懸命に彼女を観察していた。しかしその彼の態度も、女は気にする風はなかった。

「あたし、何度も書くのをやめようと思ったんです。それでもね、こんなことを言うのと笑われるかも知れませんが、私が作家にならないことは私の不幸ではなく、必ず、文芸界、活字文化の大きな損失になる。自分のために書いているんじゃないんです。書くべきだと思うから書いているんです。あたしは一流の作家になりたいとは思わない。二流は一流の下だから二流というのもおこがましい。それでも三流と呼ばれるのはしやくに触るから二流半の作家になりたい。読者を活字文化へ導くような、マンガや映画から、文学への架け橋になるような、そんな作品を書きたいんです。机の前で読む作品でなく、五百円ぐらいの値段でバスを待つ間にちよつと読みたくなるような、そしてああ、活字で書かれたものも結構面白いんだと思って、若い人を活字の世界へ引き戻すステップになるような。だから私が作

家になることは活字文化にとって大切なことなんです」

あなたたちは今、人が読みたいと思っっている作品について誤解している。読みたいから読まないんじゃない、読みたいと思う作品がないから読まないんだ

彼女は憑かれたように喋りつづけた。彼女はコーヒーを頼んだ。そしてそれにミルクと砂糖を入れてかき混ぜた。そして一度もそれに口をつけない。それを三村はじつとみていた。彼女は座るなりかばんを、空いている隣の椅子の上ではなく自分の足元に置いた。口調は活力に溢れ、態度は自信に満ち、大きく見開かれた目は燃え立つようで、話す間その力のある瞳を一時も彼から離すことはない。三村はそのすべてを食い入るように見ていた。そしてその視線にあるのはもはや冷たさではなく怯えと葛藤だった。

恭子と同じだ。鞆を足元に置く癖、いつも決まったようにコーヒーを頼み、ミルクと砂糖を入れ、そのくせ席を立つ直前まで口をつけないこと。そしてこの女はあの十年前、来生恭子が言ったと同じことを言ったのだ。同じ瞳の輝きを持つて、同じ語調で　あたしは一流の作家になりたいとは思わない。二流は一流の下だから二流というのもおこがましい。それでも三流と呼ばれるのはしゃくに触るから二流半の作家になりたい。読者を活字文化へ導くような、マンガや映画から、文学への架け橋になるような、そんな作品を書きたいんです。あの日、来生恭子も同じことを言ったのだ。ほとんど初対面の彼の前で、自分が作家になる

ことは人類の為だと公然と言い放ったのだ。

それは一人の女の身のほど知らすな暴言とは一線を画していた。時として作家はそういう間欠泉を吹き上げるのだ。作家は 真正の作家は、ある種狂人だと三村は常々感じていた。かれらは時々磁場に入り込んだように日常的な自分の姿を失う。そういう時の彼らはあらゆる計器を誤作動させているようにさえ感じる。彼らの直感を言葉に直すと、途方もなく妙なのだ。彼らは常に言葉にならないものを抱えている。長い編集者生活を通して、三村はそれこそが作家に特有の性質なのだと思うようになっていた。そして最近では、そういう破綻の見える作家に出会うこともない。あの日の彼女には、編集者の魂のどこかを揺さぶる狂信的な熱情があった。そして今、この見知らぬ女はあたかもテープを回すような正確さでその時を再現している。あの日から九年の歳月が経っていた。

三村は目の前の高岡真紀と名乗る女に言った。

「この作品からは作家的才能を感じます。成功するかどうかはわからない。でもやってみる価値はあると思います。今すぐ作家になれるというわけにはいかないが、努力すれば可能性は」 それらしい言葉を並べてみただけだった。混乱が彼の言葉をその場逃れなものにさせていた。その瞬間だった。彼女はその燃え立つような瞳を瞬間ふときらめかせ、彼をまっすぐに見つめ、囁くような声で、しかしはつきりと、彼の言葉を遮った。

「あなたがわたしを作家にしてくれるんじゃないかかったの？」

低い声だった。女の目は三村の芯を捕らえた。その瞳はその一瞬笑ってはいなかった。その時彼の脳裏に残ったのは、この世のものとも思えぬ冷たい響きだった。

あなたがわたしを作家にしてくれるんじゃないかかったの
聞き誤ることのないその言葉。三村は背筋までが凍りつくようだった。その女の瞳の冷たさが彼をどこか地獄の底へ。そんなところがあるならば、間違いなくそこへ

引き込もうとするようだった。三村は視線を外したいと思つた。しかし女の瞳は彼をつかんで放さなかった。三村は金縛りにあつたように、彼女から、その言葉を吐いたその女から、視線を外すことが出来なかった。

三村の脳裏に彼女が蘇る。

ホテルの部屋に入るなり無造作に靴を脱ぎ捨てる。鞆をベッドの足元に置くと、ベッドの端に腰掛けながら時計とピアスを外し、灰皿を引き寄せてその中に時計を置く、そのカラリとささやかに響く聞き慣れた音まで。

彼女は枕を床に放り投げる。ベッドカバーを引き剥がして床に落としてしまう。平たいベッドにうつ伏せに寝ころぶのが好きなのだ。枕を床に落とすことがなんだか不道徳なような気がして、三村は落とすあとからついて回るようにして拾ってはソファに置きに行った。ベッドの足元にたまったベッドカバーを拾ってソファの上に置いた。恭子は

そんな三村に気兼ねもせず、頬を冷たいシートにくっつけて気持ち良さそうに目を瞑っているのだ。その寝顔を見る時間が短くなることが惜しい気がして、一晩中眠ることでもできなかつたあの日々。

目の前の女は恭子よりも五つは若かつた。最後に会ったとき、恭子は若く見えたがもう四十にもなるうとしていた。恭子は茶色い柔らかな髪をしていたが、女は少女のような張りのある艶やかな髪をしていた。恭子ほどに長い指もしていなかつたし、女は恭子より鼻筋が通っていた。体の線も恭子より肉感がなかつたし、思い起こせばいくら彼女をなぞらえてみせても、恭子の動きの優雅さのかけらも彼女にはない。それでもその瞬間、恭子が本当にここにいるような気がした。何か自分が自分にいま再び、彼女をここに見せているような気がした。

何故、あの時彼女が告げた夢と野望を語れるのだ。同じ目をして、同じ興奮をもつて　十年前のあの時を　一塊の情熱であつたあの女を。

憎しみでも怒りでもない。胸をえぐるような郷愁が五十歳を越えた三村に襲いかかつた。

天井の低い部屋を怖がつた恭子。

黄色い色調の明かりを怖がつた恭子　彼女は現実の向こう側の闇を見るのが好きだった。特に彼の知る最後の頃の恭子はそれに取りつかれた感があつた。

今、もし彼女がここにいるというのなら、そう　あの

世界が黄色い色調のあかりに彩られ、彼女が怯えて泣いているのだとすれば

彼女がじつと三村を見ている。

彼は嘘ではなかったと心の中で恭子に言った。

私は嘘をついたのではない。地位を理由したのではない。持てるもの全てを利用しただけだ。

目の前の女はその三村に対してにっこりと笑った。

知っているのよ、その心の奥の奥まで　奔放で無邪気な笑みは、まるでそう言っているかのように、どこか小悪魔のような残忍さをほんのりと匂わせていた。

二

エレベーターは五階に止まった。木部美智子は「開」のボタンを押して人を送り出すと、自分が降りるのを忘れて上階までいってしまった。昨日は山手線で一つ手前の駅で降りていた。後続に乗り直しても大して時間をロスするわけではないのだが、ホームに立って電車を待つ間、情けないやら苛立つやらで、こんな時間は切り取ってなかったことにしてしまいたいと思うのだった。

心身症の始まりかしらと思ったりもする。仕事仕事で明け暮れると結局いつかはこういうことになるのだろうか。頭の隅にぼんやりと座り込んだような部分が出来て、思考の全体が繋がらない。一昨日で三十七歳になったのだと気がついたのは今日の朝だった。その長きに渡る人生に悔いはないが、悔いのない人生とはこんなものなのだろうかと思うとため息も出る。疲れだと知りながら、それを癒す手だてを知らない。眼鏡をコンタクトにしようかと思ったり、ちよつとパーマを当てて女の気分を取り戻そうかと思ったり、最近は何にもなく高級ブランドのショーウィンドーの

中に流行りのスーツを見つめていたりもする。しかし結局は疲労はそんな手軽な気分転換ではとれないのだ。

やっぱりいい記事が欲しい。はしくれでもジャーナリストである限り、得心のいく記事を書き終えることにしか癒しや安息はないのだ。六階で降りて下りのエスカレーターを待つ間、昨日ホームで感じたのと同じ情けなさをしみじみと噛みしめながら、美智子はふと思った。あたしはちゃんと女に見えているのかしら。

『週刊フロンティア』の真鍋編集長は木部を見つけると席から彼女に対してちよつと手をあげた。いやいや、電話中だけだね、君の姿は見えているからね　今ちよつと笑って見せたのはあたしに対してではなく空中にむかつてだから、電話の相手にお愛想を言っている最中なんだろう。それからまた電話に向かって声を挙げている。　いやいや、そんなことはないんだけどね、がはは、がはは。

前の編集長は攻撃的な男で、過激な記事を好んで載せて、売り上げも伸びたが世間で物議をかもし、結局短期で職を解かれた。老舗の信用とスキャンダラス記事の持つ衝撃性の境界線ぎりぎりを走っていくのは容易なことではない。新しい編集長は、その反動で就任以来保守的な選択をし続けている。それは彼個人の判断基準によるものではなく、手堅さをアピールする会社の戦略の一つに過ぎない。前の編集長で均衡を失った天秤の針を中央に戻すためにはとりあえず針を反対に振らす必要があるのだ。そういう事情で

今彼らが望むのは「社会派」のイメージの持てる、地道で裏の取れた、四角四面の記事だった。しかし考えてみれば、美智子自身としては、好都合な事態といえた。彼女は派手なりリードの記事が苦手だったから。

彼は電話を置くと美智子に合図した。

「電話でも言ったと思うけど、学校もので連載したいのよ。今どっこもそれ一色だからね。木部くん、この前テレビでやったでしょ、子供の討論会。あの子供たちを追跡取材するって企画。目鼻つきますか」

「ええ。何人かリストアップしています。ただ、荒れる学校なんてのを全面に押し出すというのはちよっと」編集長は遮った。「いや、そういうことが趣旨じゃないから心配しなくてもいいんです。絵空事書いたってうちの読者は反応しない」彼は、テープで聞くような生々しさが欲しいと言った。方向性のない語録の集大成のような形。木部はそれを了解した。来週明けから一本目の原稿にかかります。

編集長は来週明けという言葉に反応を見せた。

「何か記事になりそうなことを見つけましたか」

美智子は笑った。「いいえ。神戸のあの記事ですよ」

編集長はちよっと思案するとああと言って笑った。「あの神戸の記事ね。誘拐のあれでしょ、追跡取材。まだねばりますか。さすがに新聞上がりだねえ。そこいらのルポライターとは執念が違うわ」

奇妙な褒められ方をして、美智子も困ったように笑う。

「いいえ。ただ行つて、経過を見ようと思つていただけだね。いまさら記事にはならないと思いますよ」

美智子が立ち上がる。去ろうとすると、真鍋は後ろから声を掛けた。

「まあ、そういわず、何かあつたら見せてくださいよ。木部くんとはつきあい長いしね。邪険にはしませんよ。本音を言うつと硬派な記事は今や値千金だね」

「それで学校ものですか」

彼は笑つた。「実際の所、わかんないですよ、子供の言うことは。ただ、そのわかんなさ加減を知りたがつている大人がいるわけで、すなわち情報提供という、ただそれだけのことさ」

電話が鳴つて、真鍋がそれを取る。

学校時代は成績優秀、品行方正、不純異性交遊なしの木部には、荒れる学校などと実感がわかない。子供とも話したが、まるで異星人であり、感情移入のしようがない。方向性のない語録の集大成とはよく言つたものだ。

「明日、大体の打ち合わせをしたいんだけど」真鍋の声かして、振り返ると彼は受話器を抑えて美智子をみていた。

「明日は神戸です」

彼は、じゃ、戻つたら電話してと一言言つて、その声は煙と喧騒の中に戻つていった。

進展もない。意味づけも難しい。神戸の幼児誘拐事件は、

二年半の年月を経てもはや誰もふりかえらない。こんな事件にかかずにあうからあたしは風采が上がらないんだろうか。もつと派手な事件　そう、編集長がどこかで煙たがるような。ふとそう思った自分に美智子は笑った。そんな面白おかしい事件なんてあるもんじゃない。みなそれぞれに小さな人生を寄せ集めて生きているのだから。

下りのエレベーターがなかなかこない。木部美智子は携帯電話を取り出した。葛西弁護士はすぐに出て、やあ、木部さんですかと景気のいい声を挙げた。昨日そつちは雨だったでしょ、やっぱりね。だから今日こつちは雨なんだな。知ってましたか、神戸と東京じゃ、天候が一日ずれるんだな。明日おいでになる？　やあ、やあ、わかりました。お電話ください。

多分彼には、餡入り饅頭がやってくると聞こえていることだろう。彼は美智子が土産に持っていく東京の餡入り饅頭が好きなのだ。まあ、どこの餡入り饅頭でも、要は甘ければなんでもいいのだろうが。

しかし天候は　と美智子は考えた。逆にずれるんじゃないか。なかつたかしら。

留守番電話に伝言が残っているのに気がついた。誰からだろうと思いなから乗り込んだエレベーターは、彼女を上へと運んでいた。

三

広瀬が言った正徳病院とは、新幹線の新神戸駅から電車を二つ乗り継いだ、郊外にある中堅の総合病院だった。建物は四階建てで、その前には五十台程収容できる駐車場があり、玄関の前にはベンチが出ている。ベンチでは入院患者が座って煙草をふかして談笑していた。入り口の看板には内科、外科、小児科、整形外科、そして最近、産婦人科を消したあとがある。二階、三階は入院患者を収容しているのだろう。昼過ぎだというのに駐車場はほぼ満杯で、救急入口と書かれたドアの前には赤いポールが四角く救急車両のための場所を確保していた。

三村は病院を見上げた。

高岡真紀と名乗ったあの女は、また連絡しますと一言残して帰っていった。彼女の存在が自分に取ってなんらかの脅威になるとは考えられなかった。それでも彼は今日会社を欠勤した。そして今、見知らぬ町で見知らぬ病院を見上げている。

彼女が何者であり、なぜ今頃来生恭子を騙るのか。広瀬

という医師がそれに何らかの解答を持っているかもしれないというだけのことには自分が神戸まで駆り立てられた。三村はそれに不安を感じていた。高岡真紀という存在がどうあれ、理性の声に従うならばあの女に係わり合ってはならないのだ。それでも今、自分はここに立ち、病院を見上げている。

三村は受付へ行き、広瀬という医師と会いたいのだがと言つて名刺を差し出した。

新文芸社の雑誌編集部編集長という肩書を見て、受付の事務員の女性は怪訝な顔をした。それからお待ちくださいと言つてあちこちに電話をかけていた。それから院内アナウンスをかけた。

「広瀬先生、内科部長の広瀬先生、至急受付までおいでください」

その瞬間三村は身体が戦慄するのを感じた。彼に会いに来たはずなのに、自分の求める声に答えて彼の名がこの口ビーに響いて初めて、その現実感につぶされそうになったのだ。

いえ、彼女の持ってきた『緑色の猿』という小説が素人離れしていた上に、彼女があんまりはつきりとあなたの名前を言うものですから、医者として妙に気になりましたね。ちよつと事実関係を知りたいと思つた次第です。

広瀬を呼ぶアナウンスの声は来生恭子を再び現実の線の上に浮かび上げようとする序曲のように聞こえた。

アナウンスは二度繰り返された。十五分もたっただろうか、事務員が廊下の向こうに顔を上げた。

白衣を着た一人の男がひよこひよここと歩いてくる。かなりの長身だった。年の頃は四十歳前後、顔は見えないが、その体格と歩く様子からみればそんな感じだった。妙に目立つ感があるのはその背の高さだろうか、それともその飄々として身軽な歩き方のせいだろうか。男が受付で立ち止まると、おそらくはすみやかに連絡が取れなかったことに對してだろう、事務員は彼にちよつと苦情を言ったようだった。男はそれを気にする風もない。それから事務員は三村に視線を上げた。三村は立ち上がった。事務員が広瀬になにかを言いながら名刺を差し出し、広瀬に對して三村に注意を促した。彼が振り返り、三村を見た。

若くは見えるが確かに四十過ぎだろう。若作りにしているということではなく、まだどこか少年の青臭さが抜けない感じとでも言うのだろうか。

男はひどく驚いた顔をしていた。

三村は男に向かつてゆっくりと一礼した。

彼は三村を、空いた診察室の一室に案内した。診察室での習慣だろうか、彼は先に椅子に腰を下ろしてそれからあわてて三村にも椅子を勧めた。

三村には職業柄、相手を値踏みする習慣がついていた。まず目についたのは彼の大きな手だった。体が大きいから

手も大きい。その手には赤や黒のボールペンのインクがあちこちについていた。結婚指輪はしていない。軽装で、あまり恰好には構わないタイプのようだった。昔の田舎の青年のような朴訥さが残っている。その彼がひどく当惑した面持ちで自分を眺めている。それはなんのためにやってきたのか、未だ量りかね、かと言って何をしにきたのですかと問うてみることも思いつかない、小さな子供のような困惑の仕方だった。

「先週だったと思いますが、お電話をいただきましたね。高岡真紀という女性を知らないかと」

広瀬はええと答える。

「実はその女性から電話がありましたね。会ったんですよ。それがどうも妙な具合でした。はつきりとは言わないんですが、先生がおっしゃったように、先方はわたしを知っているようなんです。ところがわたしには全く心当たりがない。それで先生なら何かご存じではないかと思ひまして」

三村は意識してよどみなく話した。「緑色の猿」という小説を知っていること、来生恭子という女性を知っていること、そのどちらも三村はこの医者に話すつもりはなかった。三村にとって目の前の男はただの田舎医者に過ぎなかったのだ。

しかし驚いたことに、広瀬という医師は三村の大手出版社の編集長という肩書にも、その流暢な語り口にも威圧感を感じている気配はなかった。それどころかどっかりと椅

子に座り直して困惑気味に彼を見ている。それが三村を妙に不安にさせた。

広瀬は三村の真意を計るために懸命に彼を観察しているという具合だった。そして三村がそれ以上言葉を継ぐ気がないと確認してから、彼をじっとみつめたまま、言葉を発した。

「それで高岡真紀さんのことを聞きに、わざわざいらした」

そして三村をなおじつと見る。

その言葉は裏に、あなたの説明は実に不十分なのだが、あなたはそれを認識していますかという遠回しな指摘を含んでいた。しかしそれは指摘以上の物ではない。ただそれだけのためにわざわざ東京からこの神戸の郊外に足を運ぶというのは、全然説得力はないですが、それ以上の説明は加えたくないというご意向であるということ、いいですねと彼は念を押しているに過ぎず、その言葉にはこちらを責める気配はなかった。彼は三村が早々に電話を切り上げた、あの一瞬の呼吸すら嗅ぎつけていたのかもしれない。あの時の三村の表した不快感を含めて、あの時あんなに不快がっていたものをなぜ突然、わざわざ神戸くんだりまでやってきたのかと、それさえも暗に問いかけているようだった。その瞬間、田舎医者という侮りの裏をかかれたような気がして、三村は狼狽したのだ。

広瀬は全く、その言葉を確認として発したにすぎなかつ

た。彼は三村が返答に窮したその気配を嗅ぎ取ると、早々にその質問を切り上げた。

「それで具体的にはなにをお聞きになりたいのですか？」

三村は思わず繕っていた軽さを失った。そして彼を凝視していた。

「その女性が、来生恭子という名前を口にした下りについて」三村は来生恭子という名を言葉にする時、自分が一瞬言葉を飲んだのを意識した。しかし医者には、そんなことはまるで気付かぬ風だった。彼はなるほど得心の表情を見せて、語り始めた。

「わたしの患者が、いえ、その高岡真紀なんですけどね、突然小説を書きはじめたと言った。私は彼女を見るようになってほぼ半年になります。週に一時間、」そこで広瀬はちよつと言いくそうに苦笑した。「いえ、一時間半つてところですね、時間外にカウンセリングをしていたんですよ。神経症の気味のある患者でね、医者对患者に対するプライバシー保持の義務から詳しいことは話せませんが」そこで広瀬は三村に向き直ると、彼の思い詰めた視線に答えようとするように改めて真面目な口調で話しました。

「だから彼女のことについては大体は知っています。週に一時間半、一カ月に六時間、半年で三十六時間。それだけの時間自分のことを話し続けていれば、たかだか三十五年かそこらの人生なんぞ、全てを語り尽くすことが出来ますよ。だから言えるんですが、彼女はそれまで、小説なんぞ

というものに全く興味がなかった。その彼女がある日突然小説を書き出したといい、あなたのことをまるで昔なじみのように言うものだから、始めは何かの妄想が症状として出たのかとも思ったものです。しかし妄想にしてはどういうかこの……」と広瀬は言葉をまさぐった。そしてやがて言葉を次いだ。「なんだか生々しい」

そして広瀬はちよつと考えたようにため息をついた。

「それにね、彼女が書いたというその『緑色の猿』って小説が、これは電話でも話したかと思うんですが、ひどくしろつと離れしてみえたんですよ。もちろん僕は小説のプロではありませんから、小説の善し悪しなど語るべくもありませんが、それにしてもずぶのしろつとが書いたものかどうかくらい見分けがつくというものです」

三村は思った。そうとも、あの『緑色の猿』は立派な、前途有望な作家の卵が書いたものだ。そこいらの作家志願の女の習作と一緒にされてたまるものかと。しかしそれにしても来生恭子の作品を何故その高岡真紀という女が持っていたのか、何故自分のことを知っていたのか、なによりあの真紀という女は何故あれほど来生恭子の言葉と癖を知り得たのか。三村はいまだ広瀬の言葉の中にその答となるものを一つとして見いだせない。

「精神に問題のある人ですか」

それに対して広瀬ははっきりと答えた。「いいえ、基本的にはただの心療内科の患者です。正確には神経症。まあ、

さつきいった守秘義務の問題でこれ以上は申し上げられませんが、彼女に関しては、確かに空想癖はあるようですが、それは個人的な資質でして、虚言とか妄想とはいうことは係わりのない病質なんです。精神病ではありません」

「どのような容貌の女性ですか」

広瀬は怪訝げに問い返した。「何故ですか？」

三村の感情が一瞬揺らいだ。彼の問いがひどく無遠慮なものに思えたのだ。見知らぬ男に答えを要求されているということが彼をひどく不安にさせたし、不快にもした。しかし広瀬の不思議そうなその面持ちをみるうち、全く身勝手な言い分であると思いなおした。彼とてこの突然の来訪者に、誠心誠意応えているのだ。

「わたしの会った高岡真紀と名乗る女性が、先生の患者であるその女性と同一人物なんだろうかと、ふと思ひまして」

彼は一瞬三村の顔をまじまじと見た。そしてほお、とため息とも感嘆ともつかぬ声をもらした。それは、なんと面倒なことを考えつくのだと感じ入っているようであり、その発想に奇妙に魅せられたようでもあった。それから彼は三村の問いに明確に答えた。

「高岡真紀は三十五歳、ただ三十歳前後にしか見えません。小柄な美人です。髪の毛の長さはちょうど肩くらいでしょうか」

三村は確かにその女性であると広瀬に答えた。

「原稿は送ってきましたか」

「ええ。ペンネームは来生恭子。作品は先生のおっしやつた『緑色の猿』でした」

「住所は書いてありましたか」

広瀬は世にいう、親切な男のようだった。彼を見ていると、人の窮地を見ると立ち止まって無意識的に近づいてしまってお節介な人間を連想する。三村は基本的にはそういう安易な善意を軽んじてきた。蔑視していたといってもいいかもしれない。頼まれもしないのによかれと思うことをしてしまふ、そういう善意はあくまでこころざしであって、私は善良であると公然と示されてもそれが現実には何かの役にたつとは思えない。しかし今、彼は広瀬の親切に対して、これが自分のしていることかと驚くほどに素直に、高岡真紀が原稿に付けてきた住所と電話番号を渡していた。

広瀬は立ち上がると部屋を出て言った。それからしばらくして帰って来た時には片手にカルテを携えていた。そして三村の渡した住所とカルテにある高岡真紀の住所を見合わせた。

「では原稿を送ったのはやっぱり高岡真紀本人でしょうね」

すなわち二つの住所は一致していたということだ。

「しかしわたしは彼女を知らない。何故彼女がわたしを知っているのですか。あなたから電話で聞くまで、わたしは高岡真紀というその名さえ聞いたことはなかったのです」

広瀬は顔を上げると、軽やかに同意した。

「ええ、そうなんです。まったく不思議です。実は彼女が知っていて相手が高岡真紀のことを全く知らなかったって話がある一つありましてね、あなただけじゃないんですよ。高岡真紀は帝京出版の嶋って編集長も知っていると口を滑らせた。なにかを思案しているようにね。それでその嶋って人にも聞いてみたんですよ。彼も高岡真紀のことはまるで知らなかった。ただ、彼もまた来生恭子とは接点があったんですよ。それどころか実に印象深く覚えていた」

三村はしばし黙って広瀬の顔を見た。

この男は一言も、自分と来生恭子という名の女との関係を問わなかった。そして自分もまた、一言も言っていない。『彼もまた来生恭子とは接点があったんですよ』それなのに今、この男の口から飛び出したその言葉は、三村と来生恭子のかかわりを既成の事実としてはつきりと認識した上に成り立っていた。

三村が驚いたのはそれだけではなかった。帝京出版文芸第二部の嶋は当時編集長、今は部長に昇進している。そして初めて恭子が原稿を持ち込んだものその嶋のところだった。三村は当時恭子本人からその話を聞いたのだ。それは彼女が三村を訪れたのと同じ十年前のことであり、すなわち高岡真紀と名乗るあの女は、はるか昔の来生恭子の記憶まで持っているということなのだ。

何がか動きだしている。何かが息を吹き返しつつあるそ

の気配を感じる。「あなたは来生恭子をご存じなんですか」

三村の不意の問いに、広瀬は瞬間はつとして彼の顔を穴の開くほど見つめた。始めの言葉が詰まって抜けず、その後が続く膨大な言葉に栓をしてしまったような顔だった。そしてやがて苦笑いすると頭を掻いた。それこそぼりぼりと音がするほど掻いたのだ。「なんとお答えすればいいのか」そして広瀬は三村に向き直った。

「あなたは不意に電話を切りあげようとし始めた。覚えていますか。あれはわたしが来生恭子という名を出した直後だった。高岡真紀の名前が出ている間は唐突なわたしの話にもほぼ好意的と思える対応だったというのに、緑色の猿、そして来生恭子と名前が出たとたんあなたの態度は変わった。妙に気になりましたね。ひよいと思ったんですよ。来生恭子というのは仮のペンネームではなく、あの小説に付随する固有名詞のようなものではないかと。」

高岡真紀があれを書いたとはとうてい思えなかった。はつきりいますが、彼女はそんなにおつむのいい方じゃないんです。すなわち来生恭子の『緑色の猿』であり、高岡真紀の『緑色の猿』はあり得ない。来生恭子と『緑色の猿』は対なんだ。あなたのあの時の瞬間の絶句は確かにそう告白していましたよ。それで僕は気がついた。来生恭子というのはただのペンネームなどではない、実態をもった存在、実在の人物なのだよね。そして真紀が旧知のように

語った三村というその男が知っていたのは、高岡真紀ではなく、来生恭子という女性の方なんだって。そう思うと何故なのだろうと思いはじめた。何故高岡真紀が彼女のことを知っているのか。何故彼女の原稿を持っているのか。

高岡真紀にも聞きましたが、彼女はただ「私が書いた」というばかりでね。一見嘘をついているとも見えないし、医者としての立場として、嘘でしょとはいえない。あくまで患者ですから。そうなるとうますますその来生恭子って誰なんだろうと思いはじめたんです。高岡真紀は私に『緑色の猿』という原稿を見せてくれた。あなた、彼女がそれを送ってくる前からその小説を知っていたんでしょ」

三村は言葉を失った。そして小さく同意した。広瀬はその三村の反応に安堵を得たように大きくうなずいた。

「真夜中に視線に気づいて顔を上げると緑色の猿が部屋の片隅からじつとこちらを見ている」広瀬はその一節を暗唱してみせた。

「視覚の中では焼き物のような置物なのに、意識の中では生きた猿であり、いや確かに置物だと目を凝らしてみれば、ふさふさと毛の生えた生々しい猿なのだ」

毎夜、夜中の二時になると訪れ、そのたびに少しずつ近づいてくる猿　松太郎はそれを日々、ぼんやりと見つめる。

「底のない谷を挟む崖の両端にいるような気がする。

距離は三メートルほどしかないのに、二つの間に横たわ

るものは永遠に深く、冷たく、神聖な闇なのだ。

松太郎は思った。冬の海に垂れ込める雲を灰色に塗る矢崎ならこれを黒く塗るだろう。しかし冬の荒れる海原にかかる空に絵の具の灰色を塗ればキャンバスの中からもうその空が失われるように、この闇を黒く塗れば決して的確ではない。視覚には黒くとも、黒ではない。光に犯される前、意識が存在する前、認識の向こう側、すなわち無　すなわちもつと膨大なる床　そのようなもの」

それはまごうことなく『緑色の猿』の一節だった。三村は、それが広瀬の口から暗唱されることに驚いた。広瀬はそんな三村の驚きなど意に介する風もない。

「そこに書かれているのは怪奇小説ではない。いや、あれ自身が小説ではなく、幻想的な詩を思わせた。夜の闇への畏敬。ぼくらも受験勉強をしていた時代、深夜の静寂にふと気配や生命感を感じることがあった。いつもそれに包まれているような気さえしていた。その気配が今、文字となつてここに姿を現した。そんな気がしたんです。

僕がこんなに調べる気になったのは、元をただせばその小説の存在感だったのだと思います。そしてそれはその後ろに見え隠れする来生恭子という女性への興味へと変わった。

そこで僕は真紀の言った新文芸社の三村という名前を思い出した。すなわちあなたです。何故真紀はすんなりとその名をあげたのだろう。それを言う彼女の様は旧知の友人

を語るようで、そう。あればまるでよく遊びに来る叔父が従兄弟を言うようだった。

新文芸社の編集長とさえいわば日本の文芸ジャーナリズムの中枢ですよ。真紀が彼女の人生の中でそんな人間と接点を持ちえるはずがない。精神の不安定な人間が突然落ち入ったおとぎ話の一つである可能性、ある種の妄想という意味です。それはありえない。現に小説があるんですから」

一人で暮らしていると、夜中にふと人の気配を感じることもある。

人であるはずもなく、しかし確かに肌合いのようなものを感じる。それが暖かな時もあり、薄ら寒い時もある。

居るものならしかたなく、仮の住まいならそれもしなたなかるうと、しばらく同居することにする

彼はもう一度それを復唱した。それは三村に聞かせるためではなく、ひととき感慨に耽るかのようだった。

「ぼくはその冒頭を何度も読み返しましたよ。彼女はどこかで読んだ作品をほんの悪戯心でそのまま写したのかもしれない。そんな風にも思いました。しかし彼女は小説を書き出したと言った時、僕にこう説明したんです。

小説を書くということは意識と無意識の留め金を外し、漂う言葉を拾うこと。そして小説家っていうのは心の中に怪物を一匹飼っているってこと。その怪物を育てることに

より作家に成りえ、その怪物に喰い尽くされて自殺する。

人間、その世界に首まで浸かってなきや吐けないセリフ
つてもものがあるんですよ。その時彼女の言葉が妙に引っ掛
かっけていましたね、第一彼女に悪びれる風がないんです。

顔を見ていると盗作したとは到底思えない。そんな必要も
ない。もし彼女が人の作品を写したとすれば、その動機と
して思い当たることは僕の気を引くくらいのことでしょう
し、それにしてはなんだか手が込んでいます。それで僕は部
屋に猿の置物でもあるのかと問いました。彼女はそれに、
不思議そうにいいえと答えるんです。僕はどうしてどうし
てその猿は緑色なのかと問いました。すると彼女の答えは、
『緑色だったから』。ぼくは見たのかと問いました。彼女
はいいえと答える。

ぼくはこのペンネームはどこから思いついたのかと問
いました。彼女は困ったようにどこからっていつても……っ
て呟いたんです。

繰り返しますが、高岡真紀は活字を読まない人間だった。
日記も一切つけない。彼女は文字を嫌っていた。その彼女
が『意識と無意識の留め金を外す』と来た。そしてあの緑
色の猿だ。そしてこうもいうんです。『作家は必ず自殺す
る。あれは多分地獄の入口なんだ。あんなことする人の気
がしれない』あれというのは、小説を志すとか、執筆を意
識するとかいう意味だと思えますがね。ぼくは随分過激な
発言だと思いました。自殺してない作家の方が多いと思

いますけどって。すると彼女はすまして、『あら、じゃ、その人は作家じゃないのよ』

重ねていいいますが、彼女は当節の作家の名前は一つも知らないし、ミステリーも歴史小説も恋愛小説も『全部嫌い』。彼女が読むとすれば、若い女性が愛読する雑誌くらいでしょう。確かに、人間、その血を感じればその血を恐れるということもある。しかし彼女に作家の素養なんてあるとは思えません。とにかく突然のこの作品は、不自然だったんです。

ところがあなたに聞いても彼女のこととは知らない。反応したのは来生恭子って名前の方だ。それでぼくは高岡真紀が漏らした、嶋って編集長のところに問い合わせてみたんです。ただその時には、高岡真紀には触れず、来生恭子って女性を知らないかと聞きました。嶋さんが彼女に会ったのは十年前、それもその時だった一度会ったきりだった。それでも彼女のことをよく覚えていてね、いろいろと話してくれました」

広瀬はそこで言葉を切ると、その先を話すべきかどうか、三村が興味があるかどうかを思案しているように彼の顔を見た。そしてちょっと顔色を変えると、気づかうように問うた。

「どうかしましたか？」

広瀬の見た三村の顔は、血の気を失ったように真っ青だったのだ。

「先生」と三村はあえぐように言った。

「小説を書くということは意識と無意識の留め金を外し、漂う言葉を拾うこと。そして、小説家っていうのは心の中に怪物を一匹飼うということ。その怪物を育てることにより作家に成りえ、その怪物に喰い尽くされて自殺する。だから作家は皆自殺する。」

三村は目に見えてなお顔色を失っていた。もはや亡霊のようにも見える。「その女性がそういったんですか？」それは絞り出すような声だった。

「はい」

三村はうつむいた。

「何かありましたか？」

広瀬の気づかうような優しげな声で、三村は自分が取り乱していることに気づいた。彼は顔を上げた。

「いいえ。なんでもありません」

「ひどい顔色ですよ」

三村はああ、いえと口ごもった。「いいんです。それよりその、嶋って人の話を聞かせてもらえませんか」

広瀬はしばらく彼の顔を見ていたが、やがて三村を気づかうようにゆっくりと語りだした。

「彼は来生恭子のことをよく覚えていましたよ。僕は『つかぬことをうかがいますが、来生恭子という女性をご存じないですか』って、そう彼に切りだしたんです。うまいやり方とは思えなかった。それでもぼくはその時、来生恭子

が実在の人間であつたのではなかつたか、もしかしたら高岡真紀の言うのが実はその来生恭子の人間関係であつたのではないのか。そんな思いつきに妙に取りつかれてしまつてね。嶋つて人は沈黙していましたっけ。それから突然、ああつていったんです。神戸のとも何ともいう前からああ。来生恭子、つて。

もう十年も前のことですよ。それも一回会つたきりだ。

彼はそう言った。彼女のことをよく覚えていましたよ」

三村は目の前の男をぼんやりとみつめた。この男は

一体何者なのだろうか。そして今、何が起ころうとしていくのだろうか。

一度語り出すと広瀬の唇はよく滑つた。嶋の言によれば、彼女が、彼の勤める帝京出版を訪れたのは一九八九年の八月。猛暑にみまわれたその年は、東京中がアスファルトの上で茹で上げられるような夏だった。鳴つた電話を取ると若い女の声だった。彼女は長く丁寧な前置きを置いて、いわく、ここに持ち込み課というのがあると伝え聞いて遠く神戸からやってきたが、受付でそういう課はないと断られた。千枚の長編原稿のため、文学賞に応募するにも長過ぎる受け付けてくれる所がない。突然こんな電話をして、あなたにわたしの原稿を読む義務などないことはよくわかっているが、小説を書けば出版社以外、持っていくところなどない。一枚でも読んでいただければ、感謝して帰ります。

「嶋編集長は、書き出して何作目ですかと問うたそうです。すると彼女は一瞬ぐつと言葉を飲み込んで、初めての作品ですと言った。嶋編集長はその時、何を聞き誤ったか、それとも記憶が判然としないせいか、『脈絡ははつきり覚えていないが、とにかく、僕は彼女が神戸にいと勘違いしていた。それで、そこもはつきりしないが、今どこにいるのか問うたのです。すると彼女は、『と彼は思いだしながら言いました。お宅の会社の前です。お宅の会社の前の、蒲団屋の前の公衆電話からかけています。」

当時でも持ち込み原稿というのはすごく少なくなっていたそうです。その上受け付けない方針であつたらしくてね、彼女が受付で言われた通り、度胸のあるのが持つて来ても玄関払いされるのが関の山だ。しかし嶋さんたちが新入社員としてはいつた頃には持ち込み原稿つてのはしょっちゅうあつて、苦勞もしたがそういう人達と直接会うつてのも面白いところもあつたと言つてました。まあ、会社の前まで押しかけてきているってんじやどうしようもないと笑つたつて。全く、瞬間に笑つていたそうです。ふと懐かしい気がしてね。いいですよ、本来そんなことはしないんですが、まあ、いいでしょう、とにかくいらっしやい。嶋といえば受付は通してくれます。第一応接の場所を受付で聞いて、そこで待つていて下さいっていつて、それで彼女にあつたらしいんです。

十五分ほどして下りていくと、どの人だろうと、入つて

くる人間を必死で観察していたんでしょね、雑然とした応接室の中に小さく座っていた彼女は、嶋編集長の様子を見極めて、ぴよんとバネのように立ち上がったそうです。嶋編集長は「細身の小柄な、人目を引くように美人でしたよ」と言いました。

当時でもまだ、こういえばなんだが、女性作家は不美人が定番で、人並みなら美人作家ともてはやされるといふ具合で、だからなんだかぎよつとした。ちよつと目を疑うような感じでしたつて。

彼女は聞かれるままに住所と名前と年齢を答えそうです。その時まで机の上には原稿は置かれていなかった。彼は、原稿はと催促して、彼女が机の横手から大きな鞆を持ち上げた時には何事かと驚いた。

彼女は大きな鞆を力任せに引き上げて机の上に置いた。なにかのブランドの鞆で、そのチャックを開けると段ボール箱が入っていた。その段ボウルのとじめにテープが張ってあつて、その閉じ目を手荒にと引き裂いて中を開くと、中にぎっしりと原稿用紙が詰まっている。「その迫力たるや、なんだかいきなり札束を前にしたような感じがあつた」彼はそう言いましたよ。そういう気迫でしょうね。彼女はそんな嶋さんを見もせず、その原稿用紙の中から一束を取り出して、彼の前に置いた。それこそ本当にドサと音がしたそうですよ。それからカバンの蓋を閉めて、その鞆をまた机の下に置き、やっと彼に向き直った。正真正

銘の千六十三枚。ごていねいに原稿用紙にワープロで打つてあつたんですが、それで膨らむんでしょね、彼の記憶では、ゆうに二十センチはあつたそうです」

広瀬は私を見てちよつと笑つて見せた。それはちよつとウインクでもするようだった。「彼は呆然としてしまった。

そんなに持ち歩いているんですかと問うと彼女は、七部刷りました。持ち歩いているのは四部です。その印刷屋を探すのに一苦労でした。東京は全然知らないし、番号案内で山手沿線の印刷屋を聞いて、一日がかりでいちばん安い所を探しましたと言つたそうです。二日前に来て、昨日一日で印刷屋と交渉をして、今朝できた原稿を受け取つたと言つた。これだけ刷ればコピー代だけで十万円は下らぬだろうと思うと、なんだかしらなが、その女性の気迫に押し倒されそうになった。いまでもこんな人がいたんだなと思うと、ほんとうに若かりし頃の自分の情熱と熱気を目の前に突き出されたようだった。それで、どこか受け取つてくれましたかと問うと、いいえ、新文芸社では持ち込み原稿は受け付けておりませんと玄関払いを受けましたとポツンと言つたんだそうです。お宅の会社ですよね」と広瀬は三村に同意を求めた。それからまた話します。

「俯いたその様子が心細げだったそうです。彼はよく覚えていると言いました。前日は猛暑の上にざんざ降り雨だった。右も左も分からぬ東京で、一抱えの原稿をたずさえて印刷屋を回っていたんだと思うと妙に胸にこみ上げるも

のがあった。蒸し暑いさかりにきちんと長袖のジャケットを来ていたそうです。まるで行商ほどの大きなカバンを抱えていた。それこそぎつちりの原稿を詰め込んで。

ここでも初めは断られたんです。でもここに持ち込み課っていうのがあると神戸で知人に聞いていたんで、それだけを頼りに来たもので。でもそんな課はなかったんですね。それで立ちすくんでしまったわたしを受付の人が可哀相に思ったのか、中に直接電話をしてごらんなさいと言ってくれました。どこでもいいから、受け取ってくれるまで電話をしてごらんなさい。文芸部ですよ。それで

俯いたまま一気にそう言っ、彼女はそこで言葉を切った。それを見ているとこんな人の人生を抱えるのが我々の仕事だったんじゃないかって、ふと思わされたそうです。情を入れ込みすぎちゃいけないとふと我に帰って、じゃあと原稿に目を通した。ほんのお愛想のつもりだったそうですよ、その時は。まさかまともなものを書いているだなんて、思いもしなかったらしい」

三村は思い出してぼんやりと呟いた。

「思わず出来がよかった」

「ええ、よくご存じですね。その作品、お読みになったんですね」

広瀬の言葉はどこか頭の上を過ぎていくようだった。

「嶋さんはそれがねえと感慨深げにいいましたよ。」

なかなか風格のある文章だった。ぱらぱらと捲って開い

た部分を数行読むというのを四、五回繰り返したそうですが、彼の言葉を借りると、さあ、なんというのか。ちょうどハリウッドの娯楽映画をそのまま小説にしたような軽くおちゃらけた話しなんだが、文章にはなにか確かに風格があつたつて。彼はこれは天性だと直観したそうです。これはもしかしたら金脈を掘り当てたのかもしれないと。その瞬間、五感に響くものがあつた」

嶋編集長はその後、名刺を渡し、今年中に連絡をすると約束したと言つた。それから、持ち込み原稿が本になる確率は万に一つもないということも言い添えた。来生恭子は彼が原稿を持ち上げると、全く予期せぬことを見ているような顔をしていたという。

「彼女は本当に、数行読んでもらつて持つて帰るつもりだったのかもしれないね。その顔つきには、それを受け取るだなんてなんて無謀なことをするんですかとひきとめられるような気さえしたそうです。それから深々と頭を下げた。本当に、彼が応接室を出るまでじつと頭を下げていたそうですよ」それが彼女とあつた最初で最後だと、嶋編集長は言つた。

広瀬は三村に問うた。「その小説がどうなつたかご存じですか」

彼は黙つていた。そのあとのことは報告として、彼女から聞いていた。その遠い記憶が今形を成して襲いかかるように、言葉にならなかつた。

広瀬は続けた。

「彼は約束通り、その年の年末、クリスマスの前日に電話をしたそうです。なかなかよかったです。それで六百枚に書き直すように言った。それから六百枚を扱う賞を三つ教えてやってね、その出版社と締切りも。全部賞金が一千万円の大口ですよ。書き直せば最終選考くらいには残るでしょう。しかし受賞はできない。全くの第一作目ではまず受賞できません。しかしとにかく書き直して出すように。そして、出したら葉書でその旨を連絡してくれと言い添えて。他の作品でもいい、どこかの賞にだしたら、出したということだけ葉書でしらせてくれとね」

あなたに才能があるかないかは分からない。ただ、やってみる価値はあると思う。顔を上げて書きなさい。最後のコンタクトだったと嶋は言ったという。来生恭子は本名ですよ。ペンネームなんてしゃれたものはあの人にもっていかなかった。当時あの人にあつたのは有り余る情熱と狂おしいほどの情念。人が、作家へと道を踏み外す時にある全てのものを彼女は備えていたと。

広瀬はちよつと言葉を切った。それは彼の息切れではなく、三村の様子ことを気づかっているようだった。広瀬は、それからまた話を次いだ。

「それで僕はその嶋って部長から、当時の来生恭子の住所を教えて貰ったんです。嶋さんは一度でも原稿を預かった人間の住所は控えていたんですよ」

「行ってみたんですか」

「ええ。でももう他の人が住んでいました。来生恭子は二年半前に失踪していたんです。もちろんあなたはご存じのはずだ。留守番電話にテープが切れるまで連絡をくれと言いつづけ、アパート契約時の保証人である妹さんにすぐアパートに行くようにと言ったのはあなただったんですから」

三村は茫然と広瀬を見ていた。広瀬は控えめに微笑んだ。「僕はね、来生恭子の妹さんのところまで行って、その膨大な原稿をみたんですよ。そして文字通り圧倒された。妹さんは彼女の遺作のために部屋を一つ当てていました。衣装がケースに四箱、蔵書が大きな段ボウル箱に二箱、これは半分以上処分したあとだと言っていました。そして膨大な原稿の束。ざっと数えただけで三十作、四百字詰め枚数にして一万五千枚はあった。フロツピイが五十枚、作品には一九八八年を初めとして創作年月日が書かれていたが、最後の方の作品には題も日付も入っていない。そこにあるのはただ紙を埋め尽くしている膨大な量の文章　言葉だった。

夏目漱石や森鷗外の時代じゃあるまいし、今このご時世にまだこんなことをしていた人がいたのかと思うとね、ぼくはそこに立ち尽くしましたよ。その執念というか、怨念というか。開けども開けどもそこには言葉が打ちつけてある。果てし無いほどの言葉の羅列。その一つ一つが意味を

持ち、どれ一つとして同じではない。どれ一つとして同じではなく、どれ一つとして借り物でない言葉が一万五千枚の紙を埋め尽くしていたんです。僕等が酒を飲んで友人たちうさを晴らしていた時、どこに新しい店が出来たとか、あそこの航空チケットは安いとか、そんなことに人生を費やしていた時、彼女はただ紙に向かっていました。紙にむかっていたただ一人言葉を打ちつけていた。あの緑色の猿の世界に見える、静寂という名の気配の中で。僕はそれを見た時、その膨大な時間と気力に気押されましたよ。彼女は書くために他の人生の全てを放棄していたに違いない。それが僕がこの一万五千枚に見る迫力でした。帝京出版の嶋さんはその時のことを札束を目の前に置かれたようなと表現したが、その畏怖たるや、僕はその時、彼の受けた印象を理解しましたよ。

小説を書くということは意識と無意識の留め金を外し、漂う言葉を拾うこと。来生恭子なら、そのセリフをいうに相応しかったと思った」

そして広瀬はふと三村の顔を見た。

「さつき、そのセリフを確認しましたね。なぜですか」

三村はうつむき、それには答えようとはしなかった。彼はただ、広瀬に聞いた。

「あなたはその作品の全てを読んだのですか」

広瀬は笑った。「三日や四日で読める量ではありませんん」

三村は面を上げ、広瀬を見た。「でも読むつもりでいる。そうでしょう」

「興味のあることは事実です」そして広瀬はひよいと三村の顔を見た。「その女性作家は今どこにいるのですか」

「わからない。しかしその高岡真紀という患者は彼女とどこかで接触しているはずだ」

一瞬視線は空をさまよい、その声は困惑とも深い悲しみともとれる何ものかを含んでいた。三村は今、自分のその言葉の中に何かを見いだそうと見据える広瀬の視線を感じる気がした。親切げでありながら、どこか冷酷な視線

ある種の好奇。しかし三村はそれを責める気はしなかった。彼には好奇以外の何ものでもあろうはずがないのだ。それに不満を持つべくもない。三村は広瀬へと視線をあげた。

「その女性に会わせてもらえませんか」

「高岡真紀さんにですか？」

「ええ。会って話を聞きたい」

広瀬はぼんやりと三村の顔をみていた。不思議な気がしたのは、それが、三村の申し出が唐突であり、それに困惑しているということではないように見受けられたことだった。三村の見る広瀬という男は、一端滑りだすと饒舌にものを語るが、出だしでは言葉というものを呼び寄せることのできないたちらしかった。いつも不意を突かれたような顔をして困ったように相手を見る。ちょうど今のように。

広瀬が何を困惑しているのか、三村は彼の言葉の栓が抜け

るのをしばらく待たねばならなかった。やがて広瀬は困ったように、こう答えた。

「実は昨日から電話が通じないんです」

広瀬が言うには、昨日から何度か電話をしてみたというのだ。今朝も二回電話をしたが、呼び出し音どころか無音であったという。相手は神経症の患者のことであり、広瀬は気になっていたので告げた。「高岡さんのマンションを訪ねてみますか？」七時に午後の診療時間が終わっても、それからまだ入院患者の様子を見たりといろいろと仕事が残っていて、医者というのは時間の融通がつかないんですよと、広瀬は申し訳なさそうに言った。「明日にはお帰りになるんでしょうね。ぼくとしては明日の方が大変に都合がいいんですが。休みなんですよ」

三村は、明日は土曜であるから仕事は休んでも差し支えないと告げた。実を言えば編集長の仕事に土曜も日曜もない。休日は休むというのは建前であって、実際には人に会ったり原稿を読んだり、ほとんどの時間が仕事の延長上にある。だから土曜であろうが日曜であろうが、休めばそれだけ仕事に支障はでる。しかし三村は思うのだ。作家一人の機嫌をそこねたからどうだというのだろうと。

担当者が気に入らないから書けないというのなら書かなければいい。出席者が気に入らないというなら、好きにさせればいい。ろくなものが書けない作家に限って難癖をつ

ける。なけなしの力を誇示しようとする。広告部が誤植の差し替えが間に合わなければ、間違つたまま載せておけばいい。そもそも文芸誌においてグラビア写真の出来の善し悪しがなにほどのものなのかと。なんで二十七、八の作家に人生の機微が書けるものか。三ページに一度出てくる性描写なしに小説を成立させることの出来る作家は手を挙げろ。

インターネットで垂れ流されるような日常的なグチを縦横器用に裁断して文学が一丁上がる。次には一足飛びに、同性愛の男と過去のトラウマを抱えた女が同居をするという類の色物に走る。日本文学は老成しきつたと人はいうが、三村にはただ、幼稚化したとしか思えない。彼らは何も学習しようとはせず、ただ自己主張するばかりなのだ。彼らは先人を否定しているのではなく、先人の成してきたことを、先人たちが何かを成して来たという事実そのものを知らないのだ。そして文学の系譜が切れることを恐れる文芸ジャーナリズムは、ただ過剰評価をもって彼ら物知らずと文学音痴を擁護するしかないのだ。推薦文を頼まれたある老作家のつぶやきが耳に蘇る。『三村くん。この小説、どこを褒めておけばいいんだらうねえ』

人間の価値は平等ではない。類まれな資質をもっているもののみが作り得る世界は、確固として存在する。

来生恭子の名は三村にかつての編集者としての夢と情熱のかけらを思い出させていた。作家として彼女を育て上げ

デビューさせる夢、埋もれている金脈を地上に吹き出させる瞬間の快感　彼は長い間その瞬間の充実感に人生を賭けてきた。自らの仕事に誇りを持つことが出来た日々。今、彼のどこかがあのころの血潮の溜まりに触れようとしていた。

広瀬はホテルの手配もしてくれた。ここはね、アメリカンエキスプレスカードを持っている人には優待券を送ってきてね、それを使ってカードで支払うと半額で泊まれるんですよ。もってるでしょ、カード。優待券は僕のを使えばいいから。

広瀬が車を止めたそのホテルを見た時、三村は再び首筋に悪魔が滑り込んだような気がした。そこはかつて恭子と泊まったホテルだったのだ。

広瀬は相変わらず機嫌のいい顔をしている。三村はその建物を見上げ、その狼狽を気取られまいと苦笑してみせた。「手回しのいい方だ。ずいぶん面倒みのいい先生なんですようね」

広瀬もそれを受けて笑った。「やっぱりぼくってお節介ですか」

僕の父も祖父も医者でねえ、田舎の漁師町の開業医でした　広瀬は笑って、そう語りだした。

「僕の親父がそうだったように、僕も親父の職場を遊び場にして育ったんです。目の前は水平線までまっすぐに見渡

せる海でねえ。夕日がきれいなところでした。親父の仕事には診療時間はあつてないようなものでした。皆が地縁の顔見知りで、愚痴を聞いてやるのも仕事のうち、全快祝いにと持ってきてくれるのはいつだってとれたての生きのいい魚だった。真つ黒に日焼けした漁師の女房がぶら下げたきたものだ。まったく、生い立ちというのはどうしようもないものです。ぼくは今になって親の背を見て育ち過ぎたと思う。尊敬する気も真似する気もないが、医者姿の基本を父に見てしまっているようでも仕方がない。高岡真紀の時間外の診療にしたってそうでした。ああいう神経症の患者にストップウオッチ持って診療時間の二十分以内で話しを済ませて下さいだなんて、ぼくには無意味だししかおもえなかつたんです」

三村は笑った。「確かに一回に一時間半というのは東京じゃ聞いたことがあります」

ええ確かにと、広瀬は苦笑した。「医者を、体の部分を修理する修理屋だと考えるやり方はもう古い。総合病院の場合、外来患者の五から十パーセントが神経症を含む広義の心因性疾患の領域にある患者である、すなわち心と直結して身体不全が出ていると言われている、医は仁術と気取る気はないが、ベルトコンベヤーに乗ってくる製品を検査するように診察するのはどうも性に合わない。とはいえ確かに診察時間があり診察室があつて、その中で皆が効率よく規則正しく動いていくことは正しいことなのであつて、

性に合う合わぬの問題でもない。第一勤務医である限り伝家の宝刀『病院の方針』というやつには抗う術もありません。そこへもってきて病院の方は大体カウンセリングなどは時間ばかり喰って一文の得にもならずっていう姿勢ですからね。まあ、看護婦連中も僕の職務への熱意に免じて、彼女への時間外の診療については目をつぶっていてくれた。まあ、内科部長という肩書の力もあつたんでしようが。ただし若い女性患者と時間外に長時間一緒にいることについては批判的な声もあつたことは認めますがね」

三村はそれをききながらちよつと考えた。「高岡真紀という患者にあまり関わるのはあなたには得策じゃないということですか？」

広瀬は我に帰ったように微笑んだ。「いや、そんなつもりでお話したんじゃないやありません。口が滑ったということでお勘弁して下さい」

広瀬は明日十時に迎えに来ますと言い残して帰っていった。

三村はホテルのベッドの端に腰掛けた。こうしていると自分が一人で部屋に座っていることがひどく切なく思えた。ガランとした広い部屋に一人で座っている。もうバスルームから一人でご機嫌に泡を立てて遊んでいる声が聞こえることはない。テレビのCNN放送を原語で聞いていて、ニュース、日本語にしてくださいなと叱られることもない。

ねえ、どっちがあたしのバスローブ？

彼女はここでも自分に原稿を見せ、彼が感想を喋るのにも大した興味も示さず、まるでそこに一人きりですわっているかのように、ほんのりと微笑んで町を見下ろしていたものだった。

小説を書くということは意識と無意識の留め金を外し、漂う言葉を拾うこと

作家は心の中に怪物を一匹飼っている。その怪物を育てることにより作家に成り得、その怪物に喰い尽くされて自殺する。自らの中に飼った怪物に喰い尽くされていく

何故高岡真紀はその言葉を言い得たのか。

広瀬の言った通り、その世界に首までどっぷり漬かっていないと吐けないセリフがある。

そしてその世界に身も心も捧げていないと人の心に残すことの出来ない生きざまがある。

彼女は骨の髄まで作家だった。かつて彼女に、三村は何かの話のついでに、ある大作家が本当は他人の作品を盗作することによってその地位を築いたとすれば、その大作家の社会に対する裏切りは、彼を敬愛していた一読者にたいする裏切りでもあり、その作家を心から尊敬し、彼を慕って作家になったある作家にとって彼を殺すに足りる動機になるだろうと言ったことがある。彼は芸術家というものはそういうものだと思っていた。なにより大切なのは美意識であろうと。その美意識の為なら何物をも犠牲にする人種であろうと。

彼女は笑った。

馬鹿馬鹿しい。作家が作家に憧れたりするものですか。誰が何を書こうと、何をしようとして、例え盗作の果てに名声を得ようと、知ったこっちゃない。作家にあるのは自分だけ。自分が何をもちめ、何を形に現すかということだけ。作家なんてものはね、誰にも何にも憧れたりなんかしないんですよ。ただ自分を、自分というものの存在と存在するというこの意味を、命を賭けて自分の中を見つめつけただけ

彼はベッドの端に腰掛けたまま、気がつくと思を止めていた。

恭子は、思考に入り込むと自分に手があり指があり爪があるってことさえ忘れてしまおうと言った。いまだ人の形をして存在しているってことが奇異に思えると。

三村は膝の上でそつと指を広げて見た。見慣れた五本の指がそこにある。

彼の脳裏に再び言葉が蘇った。彼女が最後に残した言葉。彼女が最後に書き残していた言葉。三村が最後に恭子の部屋に入った時、そこには未完の原稿が残っていた。

真夜中にあなたを見る目

あなたは言語というものが存在すると思っ
ているでしょ。

でも本当はそんなものはないのよ。

あれは幻想　　あれは幻覚。

光を遮ったカーテンのこちら側で、その言葉は誰か人を待つように机の上に乗っていたのだ。あれは果たして本当に原稿の一部だったのだろうか。

携帯電話に伝言が入っていた。

本郷素子からだった。おそらくは本題に入るための枕詞のようなものだろう、まず「花の人」の重版に対しての感謝が述べられ、それからちよつと間を置いて、彼女の沈んだ声が聞こえていた。

「また無言電話が入っているんです。もう一カ月近くになる。ねえ三村さん、連絡して」

来生恭子は骨の髄まで作家だった。まるで作家になるためにこの世に生を受けたような女だった。「花の人」の新世紀文学賞受賞　ただ自分を、自分というものの存在と存在するということの意味を、命を賭けて自分の中に見つめつつづけるだけと言った彼女は、それを喜んでいるだろうか。

六月十四日　午後十時三十二分　はるか眼下を、道行く車がライトを付け始めていた。かつて恭子が神戸の夜景を見下ろした位置に立ち、まさに今街全体が光を放とうとするその夕暮れのほんのりした闇を見下ろしながら、三村は携帯電話のデジタル画面の中から本郷素子の電話番号を消した。

(続きは正式版でお楽しみください)

<http://www.ebunko.ne.jp/>

解説 歴史に残る電子出版

大森 望（おおもり・のぞみ）

<http://www.itokyo.com/ohmori/>

いきなり自分の話ですみませんが、大森が小説新人賞の予備選考を担当するようになってからもう十年あまり。今も一年に二百から三百の原稿を読んでいるから、この間に目を通した原稿は、たぶん二千本を超える。

さすがにこれだけ経験を重ねると、「黙って座ればぴたりとあたる」とまではいかないにしろ、最終選考に残るレベルの作品（である可能性がある）かどうかは、冒頭の数ページを斜めに読んだだけでだいたい見当がつく。といても、いきなり派手なシーンが連続するとか、突拍子もないキャラクターが登場するとか、そういうこととはとりあえず関係ない。なんでもない一節にも作者の才能は否応なく現れてしまうものだし、シナリオではない以上、プロットや設定以前にまず文章で楽しませるのが小説ってもんでしょ。

この『神の手』に関して言えば、第一章の書き出しから、

「お、これは……」と思わせる。視点人物は、「新文芸」編集長の三村幸造。長年にわたって文芸雑誌の副編集長をつとめてきた彼が編集長に昇格したのは一年半前のことだ。

当然の人事ではあったが、本人には奇妙に醒めたものがあつた。出世に欲がなかつたわけではない。男であるから悪い気はしない。実際家族も喜んだ。昇進の夜、普段はすれ違いばかりの上の娘は、風呂上がりの濡れた髪のまま居間に顔を出して「おとうさん、おめでとう」と一言言つて忙しそうに部屋に上がった。今年大学に入つたばかりの下の娘は新しい名刺を珍しそうに眺めながら「編集長の上は何？」と問うた。二人の娘が部屋に引き取つた後、妻がテーブルに残された名刺を手にとって、「副つて一文字が取れるだけでこんなにすがすがしいものかしら」とポツリと呟いたのは、子育てを始めとする家庭の些事に一切関わらなかつた夫を持つ自分自身に対するねぎらいだつたような気がした。(後略)

とりたてて名文というわけではない。この短い一節から、主人公の家庭環境、性格から仕事ぶりまでくつきり浮かび上がってくるけれど、だから目を引くというものでもない。読者にリアリティを感じさせる一種の生活実感を、そこはかとないユーモア感覚(あるいはペーソス)をまじえて描

き出す。そのスタイルに天性の作家的な資質がある。これがもし新人賞の応募原稿なら、A評価候補として、「あとでじっくり読む原稿の山」に積むところだ。

実際、この第一印象がまちがっていなかったことは、小説を読み進むにつれて明らかになってくる。ミステリ系の新人賞でも、ホラー系の新人賞でも、応募すればほぼ確実に最終選考まで残るレベルの作品だろう。この小説のプロローグに出てくるような文壇パーティーで受賞を祝福されてもおかしくない。

それがなぜ、電子出版によるデビューという道を選んだのかはよくわからない。しかし、名も知らぬ新人作家の電子出版作品を購入してみようという酔狂な読者にとっては、むしろもっけのさいわいと言うべきか。驚くべき才能が初めて世に出た瞬間の、数少ない生き証人になれるのだから。

といっても、これだけでは『神の手』がどういう小説なのかさっぱりわからないだろうから、もう少し詳しく説明する。

主役は前述の文芸誌編集長、三村。ある日、広瀬と名乗る神戸在住の医師から、編集部に電話がかかってくる。いわく、広瀬が担当する患者・高岡真紀が、自分は小説家だと言いつ出した。三村に小説を見てもらっているそうだが、それは本当なのか？

三村は、高岡真紀の名に聞き覚えがない。しかし、彼女

が書いたという小説のタイトルを聞いた瞬間、三村は絶句する。「緑色の猿」。それは、かつて彼がよく知っていた作家志望の女性、来生恭子の作品名だったのである。

電話の数日後、一通のぶあつい封筒が届く。差出人は高岡真紀。同封されていたワープロ打ちの原稿は、まちがいはなく、来生恭子が八年前に書いた短編だった。いったいどういうことなのか？

封筒の電話番号を頼りに神戸在住の高岡真紀と連絡をとった三村は、東京で本人と対面する。その見知らぬ女は、「来生恭子は自分のペンネームだ」と主張する。そして、十年前に三村がはじめて来生恭子と出会ったときと同じセリフ、同じしぐさを反復する。

事情を探るため、神戸の広瀬医師を訪ねた三村は、真紀が恭子の人生を自分の人生として語り、恭子が話した言葉を自分の言葉として話していることを知る。

「小説を書くということとは意識と無意識の留め金を外し、漂う言葉を拾うこと。そして、小説家ってというのは心の中に怪物を一匹飼うということ。その怪物を育てることにより作家に成りえ、その怪物に喰い尽くされて自殺する」

それは、三村がはつきり記憶している恭子の言葉とそっくり同じだった。まるで、その来生さんが高岡さんにとり憑いたみたいですね、といぶかしげにいう広瀬。

こうしたやりとりを通じて、来生恭子という女の姿がし

だいにくつきりと浮かび上がってくる。高岡真紀の物語として語られる、来生恭子の物語。彼女は文字通り、書くことに憑かれた女性だった。一週間の休暇をとり、はじめて書き上げた千枚の原稿を持って神戸から上京し、大きな鞆にコピーを詰めて出版社に持ち込みをしてまわった女。この「持ち込み作戦」のディテールが、彼女の異様なまでの情熱を浮き彫りにする。真紀はどうしてこれほどまでに詳しく恭子の人生を知り得たのか……。

視点人物の三村は、必ずしも「信頼できる語り手」ではない。三村と来生恭子のあいだになにがあったのか、それが三村の内面描写として地の文で書かれることはなく、秘められたいきさつは他の登場人物との会話から読者が推測するしかない。そうした構成のうまさも新人離れしている。しかも、このあたりまで読み進んでも、「神の手」がミステリとして収束するのか、それとも超自然的な現象を許容するホラーになるのか、読者には判断がつかない。消えた作家や幻の小説をモチーフにした作品は、ミステリでもホラーでもたくさん書かれているが、「神の手」は、そうした先行例のどれとも違う展開で、読者を驚掴みにする。よくある文壇内幕物のサスペンスかと思いつつ読み進むうち、いつのまにか迷宮に迷い込む感覚。来生恭子の小説として断片的に引用される作中作も異様な迫力に満ち、小説に強烈なリアリティを与えている。

この作者を世に出したという意味で、「神の手」は歴史

に残る電子出版となるのではないか　そんな気さえして
くる。オンライン出版によるデビューは、まだ一般に認知
されているとは言いがたい。しかし、だからこそ、この小
説をダウンロードして読むことで、歴史の証人となる特権
を味わってほしい。

神の手「上」 デジタル立ち読み版

発行日 2001年10月20日

著者 林 雅子

写真 Tomoyuki.U

<http://www.yun.co.jp/~tomo/photo.html>

デザイン 飯野岳夫

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町 3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C)MASAKO HAYASHI, Tomoyuki.U, LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載・転売することは固く禁じられています。